パンツ脱いだら通報された

烈火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
パンツ脱いだら通報された

【Ｎコード】
Ｎ６６６３Ｙ

【作者名】
烈火

【あらすじ】
俺はただ頭にパンツをかぶりながら散歩をしていただけなのに市民の平和を守るためとかなんとか言っちゃって、市民である俺を逮捕するとはこれいかに。　あれだぜ？　俺自身は無職だけど幼馴染なんて凄いんだからな。　１９歳になっても少女で押し通してる凄い人なんだからな。　……まったく、管理局の人は話も聞かないのか……。　これで逮捕されるの何回目だよ。

1．俺、無職

「時というものは残酷なものである。　９歳でロリロリでツインテールで天使のような幼馴染も昔は“魔法少女”といわれみんなに可愛がられたものだ。　バリアジャケットだって小学校の制服を参考にしたらしく9歳という年齢も相まってそれはそれは可愛らしいものであった。　しかしどうだろう……１０年の歳月が過ぎ、その幼馴染も随分とかわってしまった。　あの純粋無垢だった幼馴染はいまは１９歳にもなるのにいまだに“少女”と信じて疑わないらしい。
　本当に俺と3年間高校に通ったのかと疑いたくなってくるほどである。　髪型にしてもそうだ、いつもはサイドテールにしているのにここぞというときにはツインテール。　確かにツインテールはかなりの萌えポイントであるがいかがなものかと思う。　極めつけはあのバリアジャケットである。　あれっていまだに小学校の頃の制服をモデルにしているみたいだし正直コスプレにしかみえない。いいのか、管理局。　おまえらのエースこれでいいのか？」

「ニートの人には言われたくないんだけど……」

一人さびしく家でゲームをしながら、幼馴染のことについて考えているとどうやら口から出ていたらしくたったいましがた帰ってきたであろう高町なのはに聞こえてしまった。　ここ、俺の部屋なんだけど……

「というか、この家は私とフェイトちゃんが一緒に借りたんだからね。　あまり変なことしないでね？」

「変なことって、なのはやフェイトの下着を洗濯すると見せかけて実は俺の部屋に隠してるとかのこと？」

「ちょっとまって、いまの議題について3時間ほど話し合おう」

「オーライオーライ、まずはその魔力弾を消してくれ」

ちょっとした冗談のつもりだったのだが、意外になのはは怒ってきた。

「もう……そういう冗談は禁止だって言ったでしょ？　まったく、高校を卒業してもかわらないんだから……」

「19歳にもなっていまだにいちごパンツ履こうとする奴に言われたくないよ」

「ちょっとなんで知ってるのッ！？」

なんかすんごい勢いでこちらに近寄りその情報を流したのは誰かと問い詰めてくる。　地味に首が絞まって痛いのですが……。　それにいちごパンツの件なら桃子さんが嬉しそうに話してましたよ。

みなさんお察しかと思いますか、この可愛らしい女性、高町なのはと俺は幼馴染である。　俺の親となのはの親――士郎さんと桃子さんがとても仲がよかったのである。　その関係上、小さい頃から二人でよく遊んだり、なのはで遊んだりしていていまもそういった関係が続いている。

「そういえばなのは、何しに来たんだ？　今日は19時に帰ってくるとメールがきたのを覚えているんですが」

「うん、その予定だったんだけどちょっと帰りが遅くなりそうだか

らそれを伝えようと思って」

「そんなことでここまで？　あいかわらずやることがすげえな。え～っと、帰りが遅くなるっていうとあれか、はやてが設立した部隊のこと？」

「そうそう、機動六課だよ。　ようやくスタートしたし少しの間だけバタバタしそうなんだよな～」

「いつもバタバタしてるじゃん。　俺からバタなのなんて愛称で呼ばれてるし」

「うるさい。　まあ、そういうことからだからちょっとの間だけ遅い帰りが続きそうなんだ。　ごめんね！　夕食用意しようとしてたんでしょ？」

「べ、べつにあんたたちのために作ろうなんて考えてないんだからねッ！？」

申し訳なさそうな顔でなのはが謝ってくるもんだからとりあえずツンデレ系で返してみることにした。　恐ろしいほどに無表情でこちらを見返している。　ゾクゾクするぜ……！

「まあ、事情はわかったよ。　ほんじゃ、夜に食べても次の朝に胃がもたれないような夜食置いておくから適当にフェイトと食べておいてくれ」

「ふふっ、ありがと。　それじゃ私行ってくるね」

「あいよー」

なんだかわからないが笑顔でお礼を言われたあと、なのはは手を振りながら俺の部屋をあとにした。　そして丁度、玄関が開いて閉じられる音を確認する。　さてさて……スーパーにでもいって食材買ってこようかな。　俺の分は適当にカップ麺でいいや。　一人分って作るとなるとどうもやる気が沸いてこないんだよな。

１０畳ほどのフローリング部屋に、ベットや本棚、クローゼット、机、パソコン、テレビなどの生活感あふれるものが並んでいる。クローゼットから適当に服を着てサイフをジーンズのポケットに突っこんでから部屋を出た。

「あ、そうだ」

部屋を出たところでとあることを思い出して戻る。　机に置いてある写真立ての中で静かに微笑んでいる女の子に向かって優しく挨拶をした。

「行ってくるぜ、初〇ミクちゃん」

ミクちゃん、無職だけど頑張るからね

1．俺、無職（後書き）

どもども、烈火です。　基本的に息抜き投稿にはなりますが、きっちり仕上げていきたいと思います。

一話あたり２０００文字くらいを目処にしてますのでさっくり読めるかと。

2．ちょっとこい

「しまった牛乳買うの忘れてた」

夕食の買い物も終わり、さっさとカップ麺を食った俺はなのは達が帰るまでの間をゲームしながら過ごしていた。　画面内ではポニーテールの女の子が頬を赤らめながら俺の名前を愛おしそうに呼んでいるところであったのだが――

「牛乳がないとなのはが怒るもんなー。　どんなに頑張ったところでフェイトの胸には勝てないというのに。　あーでも行きたくないなー」

その場でぐずぐずすること3分、とりあえずゲームをセーブしてしょうがなく牛乳を買ってくることにした。　落ち度は自分にあるんだししょうがないよな。

「あ、そうだ。　このひょっとこ仮面を装着していかないと」

机の上に無造作に放り投げられていたひょっとこのお面をつける。
　そういえば昔はこれで泣いているなのはに追い打ちかけたっけ。

ひょっとこのお面をつけた俺は寝間着に黒のコートだけを羽織り家を出た。

このとき、素直に牛乳なんか買ってこなければあんなことにはならなかったのに……

☆

「あ、あの！　なのはさん！」

「ふぇ？」

ポッキーを食べながら仕事をやっていると、新人であるスバルが声をかけてきた。　スバルは熱血という言葉がよく似合うボーイッシュな女の子だ。　いまはまだ経験も足りないけど磨けば光る素質をもっている。　ちなみに私の直属の部下にもあたる。

「どうしたの、スバル。　もしかして書類仕事でわからないことでもあったかな？」

「いえっ……その……あの……」

やはり上司と喋るのは緊張するのかスバルはちょっと言いにくそうにしていた。　その気持ちは私の体験してるからよくわかるよ。自分より立場が上の人や目上の人と話すときって緊張するもんね。

なのははスバルが何か言うまで優しくほほ笑んで見守ることにした。
　やがて意を決したようでスバルはその口で大きな声でとんでもない爆弾発言をなのはにかました。

「なのはさんとフェイトさんが男の人と同棲してるって本当ですかっ！？」

「ぶッ！？」

思いもよらない発言になのはは唾を飛ばした、というか噴出した。

そして慌てたようにスバルの口を塞ぐか時既に遅し。　その場で残って仕事をしていた面々は面食らったような顔をしてなのはとフェイトのほうを交互にみていた。　みるとフェイトのほうも驚きのあまり書類にいちご牛乳をこぼしたようで慌てて拭いている最中であった。

「あのッ、本当なんですかなのはさんッ！　もしそうだとしたら私はどうすればいいんですか！？」

どうすればいいのかはこっちが教えてほしい。　なのははそう思った。　一応、なのはの身内ならば彼のことを知っているのだが……いかんせん此処はつい先日できたばかりの部隊であり、そんな周辺のことの話よりもまずは書類などを片付けることが優先だと思っていたのだが――

「って、ちょっとまって！　どうしてスバルがそんなこと知ってるの！？　誰から聞いたの！？」

「そ、そうだよ！　私もなのはも喋ってないんだからこの中に犯人はいるはずだよ！」

いちご牛乳まみれになった書類をドライヤーにかけながらフェイトはこの場で仕事をしていた知人たちを振り返った。

ヴィータ・シグナム・シャマル・ザフィーラ・はやて・リインフォース　の計6人に視線を走らせるフェイト。　そして一人の女性に目を止めた。

「は、はやてだね！」

「ちょっとまちいな！？　なんでいきなりうちって決めつけるん！？」

「だってはやてはなのはのポッキー食べようとして回避されてたじゃん」

その一言ではやての体が固まる。　どうやら図星のようだ。

「ちょ、ちょっとまってーな！　いずれわかることなんやし、１年間ともに過ごす仲間なんやで？　やっぱりあまり秘密にするものどうかと思って、私はスバルに言ったんや。　うちもスバルがあんな行動に出るとは思ってなかったんよ」

「ほんとうに？」

「ほ、ほんとや！」

立ち上がりながら必死に弁解するはやて。　なのはとフェイトはそんなはやてに疑惑の目を向けながらもひとまず落ち着くために座ることにした。

「まあ、いずれわかることだからいいのはいいんだけど……ねえ、フェイトちゃん」

「うん……それはいいんだけど……」

二人して溜息を吐く。

そのとき、フェイトの袖を誰かが引っ張る。　フェイトが引っ張られたほうに目を向けると自分の子どもたちであるエリオとキャロが

立っていた。

「どうしたの二人とも？」

「あのフェイトさん。　もしかしてひょっとこさんのことですか？」

キャロがそう聞いてくる。

「えーっと、うん。　ひょっとこさんだね」

苦笑いしながら答えるフェイト。　確か自分が高校生のときに二人とも別々に彼に合わせたんだったっけ。　彼は『宇宙一カッコイイ俺が会いにいったらその子たちが惚れてしまうではないかっ』とかなんとかいいながら、そばに置いてあったひょっとこのお面をかぶって会いにいったんだ。　それが二人にも受けたのを覚えている。

意外と彼って子どもには優しいところがあるんだよね。　そうそうその他にも思い返せばいろんなことが――

「僕もひょっとこさんに女の子がいっぱいでるゲームをもらったことは覚えてますよ」

「わたしはメイド服をもらったこと覚えてます」

――いろんな悪夢よみがえってくる

そう、確かに彼は渡していた。　もちろんメイド服は私が回収、ゲームのほうはその場でたたき折ったことを覚えている。

『おいおい……そんな男大丈夫なのか？』

どこからかそんな声が聞こえてくる。　……そして言い返せない自分が悲しい。　というかもっと言ってほしい、あわよくば誰かに説教をお願いしたい。　お兄ちゃんとはなんだかんだで仲がいいし、ユーノに至ってはしょっちゅうメールしてるみたいだし。　母さんはお買いものまで一緒にいく始末。　ほんと、誰かに止めてもらいたい。

とりあえず、ざわざわしだしたみんなを落ち着かせるためになのはと二人で説得してみよう。

フェイトは目配せでなのはに合図して、みんなに着席を促した。

☆

「君、その手に持っているブラを渡しなさい」

「そうやってクンカクンカする気だろう。　貴様に嗅がせる匂いではない！　去れ」

迂闊だった……。　あのとき、家を出るときに気付くべきであった。

フェイトのブラを装着してたことを

何かがおかしいと思っていた。　まず店内に入ってから他の客が俺のことを露骨に避けていた。　そして店員もどこかに連絡をしていたのだが……もちまえのポジティブさで地下アイドル（大嘘）の俺が来たことで騒いでるのかと思いきや……まさか管理局員のおっさんに通報していたとはな。　やることがえげつないぜ

「君ね、いまの自分の状況わかってる？　俺も捕まえたくないの。

今月で君のこと何回捕まえたと思ってんの？　こうやって俺と君が職務質問するの何回目か知ってる？　今月で１０回目だよ？　なんで３日に１回は君のふざけたひょっとこお面を見なきゃいけないのさ」

「奇遇ですね、俺もなんで３日に１回の割合でおっさんと密室で過ごさなければいけないのかとずっと思っていたんですよ」

「それは俺だって同じだよ。　いまからお姉ちゃんたちと遊ぶんだからさっさとこい」

おっさんは溜息をつきながら俺のほうににじり寄る。

そもそもなぜ俺がこんな目に合わなければいけないのか？　俺はひょっとこのお面をつけて黒のコートを羽織って、間違えてフェイトのブラをつけて牛乳を買いにきただけなのに。

おっさんの足に合わせてこちらも下がっていくと、電柱のところに不審者の張り紙が貼ってあった。

『不審者に注意！！　黒のコートを羽織り、奇天烈なお面をかぶった下着泥棒が多発しております！　住民の皆様はみつけたらこちらの番号までご連絡お願いします！』

「ほーう……なるほどね。　こんなところに同志がいるとはな。もっとも下着泥棒はしないけど」

そしてこいつのせいで俺はおっさんと密室で夜を過ごすことになる

んだな。

俺は名前もしらない、顔も知らない相手に向かって呪いをかけることにした。

2．ちょっとこい（後書き）

あのふざけた顔が結構好きです

3．おっさんと過ごす夜

「はーい、それじゃ椅子に座ってー」

健闘むなしくおっさんに捕まった俺は交番へやってきた。　そこではおっさんと二人きり。　みなさん、ちょっとだけ考えてほしい。　深夜におっさんと二人きりだぞ？　なにか間違いが起こるにちがいない。　……そう、いつもは俺に冷たい態度をとるおっさんだって深夜の密室という魅惑増量世界によってその皮を脱いでしまうわけだ。

「あのな……いつもはお前に冷たい態度をとってるんだけどよ……」

「ちょ、まてよ。　俺ら男同士なんだぜ……？」

「そんなことわかってる……！　だけど、俺のこの胸の高鳴りは抑えられないんだよ！」

「おっさん……！」

「……今日はまた随分と頭がおかしいな。　どした、なにか嫌なことでもあったんか？」

おっさんが菩薩のようなほほ笑みでこちらをみていた。　なんか死にたくなってくる。

「いえ、持病が発症しまして。　もう大丈夫です」

「そうや。　まあ若いときは色々あるもんだからな。　恋しかり友

情しかり」

「おっさんが言うとキモイですね。　そういえば、おっさんは結婚してましたよね？　娘さんもいた気がするんですが」

とりあえず話題をそらしてなのはたちが帰ってくるまでの間、退屈しのぎにおっさんと話しをすることに。

「おー、しとるで。　娘は二人おる。　長女が１６歳で次女が７歳や」

「離れてますね～。　でも長女はいい年ですから恋人の一人や二人いるんじゃないですか？」

「やっぱお前もそう思うやろ！！」

いきなりおっさんが身を乗り出しながらこちらに近づいてきた。近寄るなハゲ

「どうも最近おかしいんや！　家に帰ってくるのだって１９時やし、この頃は化粧もしとる。　それに服だってミニスカートやニーソとか萌え萌えで受けでいいのを買ってくるようになったんや！　これは絶対男がおる！　毎日毎日学校でプレイしとるんや、絶対そうや！　もしかしてお前か！　お前がその男なんか！」

「落ち着けよおっさん、後半好きなシチュエーションが混じってるぞ」

まあ、確かに学校でのプレイは興奮するよね、うん。　しかしおっさんが娘さんをこんなに溺愛してるとは……、どことなく士郎さん

を思い出す。　士郎さんもなのはのことになるとおかしかったからな。　授業参観のときや合唱コンクールのときだってはしゃいでたし。　父親というものはそういうものなんだろうか。

「だけど娘さんも１７歳なんでしょ？　だったら１９時に帰ることや化粧なんて当たり前じゃないの。　ミニスカやニーソだって可愛いから履こうと思っただけかもしれないじゃん。　あんまり心配なら娘さんに聞けばいいだけの話だろ？」

「……この頃、口をきいてくれないんだ……」

「……ごめん」

項垂れながら絞り出すように呟いたおっさんはとても小さく見えて、たまらずそう返してしまう俺であった。

☆

「つまりや、その同棲まがいなことをしている男性はなのはちゃんとフェイトちゃんの奴隷みたいなもんなんや」

『なるほど～』

フェイトちゃんと二人で説明すること３０分、身振り手振りを加えながら話していたのだがどうやらちゃんと伝わらなかったらしい……

「やっぱりそうですよね！　なのはさんは女の子が好きなんですから、好き好んで男と同棲するなんておかしいと思っていたんです。

やはり奴隷用として置いておいたんですね！」

嬉々として私の手を握りしめながら離さないように話すスバル。この子の中で私がどういった位置に存在しているのかとても気になるのだが……聞いたら予想通りの答えが返ってきそうで聞けない。

「ち、違うってばスバル！　わたしやフェイトちゃんが管理局の仕事で忙しいから家事をお願いするかわりに住まわせてるだけだって！　ほんと奴隷みたいな扱いなんて断じてしてないから！　ねえ、フェイトちゃん！？」

「そ、そうだよ！　どちらかというと奴隷より主みたいだよ！」

確かにそれは間違ってないかも。　我が物顔で家を占領してるし。いつも間にか家を改造してコスプレ部屋とか撮影スタジオ作ろうとしてたし。　あの奇行に慣れてきた自分もアレだけど。

「そんな……だったら私はなにを信じて1年間頑張ればいいんですか！」

むしろ何を信じていたのかこの娘に問い詰めたい。

「やめなさいよスバル。　なのはさんたちも困ってるでしょ。　それになのはさんたちは大人なのよ？　男性と同棲くらいするわよ」

「そんな、ティア！？　ティアまでそんなこというの！　ティアだってなのはさんたちのこと信じてたじゃない！」

「ええ、信じてるわよ。　けどね……だからってなのはさんたちに当たったら元も子もないでしょ？」

スバルの肩に手を置きながら優しく説得していくオレンジ髪をツインテールにした女の子、ティアナ・ランスター。　この娘もスバルと同様私の直属の部下にあたる。　魔力は低いが冷静な判断力と視野を広くみる目があり努力を怠らない娘である。　将来の夢はフェイトちゃんと同じ執務官らしいが、きっとこの娘なら立派な執務官になってくれるにちがいない。　げんに、暴走しているスバルを正気に戻そうとしているし。

「――だからその男性のほうをコロコロすれば私たちのなのはさんは戻ってくるのよ」

「その手があったか！」

訂正、この娘も暴走していた。　というかいい加減私の疑惑もどうにかしてほしい。

「あのね、二人とも。　一つだけいいかな？」

「はい、なんですかなのはさん」

「ちょっとまってください、こういうことは部屋に入った後にいうのがセオリーなんだと思うのですが……」

「うん、そんな不安そうでありながら羞恥に悶えている表情なんてしなくていいよティア。　絶対に思っていることと正反対のこという自信があるから。　あのね、私はべつに女の子だけを好きってわけじゃないんだ」

「な、なのはその言い方だと……」

「え？」

フェイトちゃんがオロオロした様子で話しかけてくる。　なにか間違ったこと言ったかな？

「なるほど、男性も女性もどちらもいけるというわけですね。　流石なのはさん……これがエースというものなんですね……！」

「私勘違いしてました……！　やはり女の子もいいですけど、それなりに男性の方ともお付き合いしないとダメなんですね！」

「とりあえずいまのでエースのなんたるかをわかってもらわれたら困るんだけどっ！？　二人とも私が言ったことちゃんと理解したの！？」

質問しようとした私だが二人ははしゃぎながら席に戻る。

「ねぇ、フェイトちゃん」

「うん、言いたいことはよくわかるよなのは」

顔を見合わせて、ひしっと抱き合いながら二人で呟く

「「なんでわたしたちが女の子好きになってるの……」」

こんなの絶対おかしいよ

☆

「ただいま～って、なんだ二人ともまだ帰ってきてないのか」
おっさんを慰めた後、速攻で帰ったのだが二人ともどうやら帰宅していないらしい。　日付だって変ったというのにまだ帰ってきてないなんてお兄さん怒っちゃうぞ。

「と、いうわけで疲れているであろうあいつらを溺れさせるために風呂を沸かしました。　温度は３８。で二人をバカにするためにアヒルの遊び道具もいれておきます」
小さい子どもの遊び道具であるアヒルくんが何故この家にあるのかはわからないが、おおかた世間でアヒル口というけったいなものが流行ったからだと推測する。　それはともかく、目の前には熱々の風呂。　何故、俺がこんなものを用意したかというと……

「まずあいつらを風呂に入れて溺れさせます。　すると二人のうちどちらかが悲鳴を上げるはずです。　そこで俺が颯爽と登場するわけですよ。　介抱という大義名分があるわけだから、世の野郎どもがうらやましくなるようなことだってできてしまうわけである。
流石だな、俺」

「ただいま～、やっと帰れたよー」
「ほんと、大変だったよね～……。　あれから職場の空気がへんな空気になるし」
「ほんとほんと」
「おー、おつかれさん」

丁度風呂が沸きあがったところで二人が帰ってきた。　二人とも、いかにもぐったりとした表情をしていていい具合に弱っている。

「いまから夜食作るから、その間に風呂でもはいってこいよ」

「うわー！　お風呂沸かしておいてくれたの！　ありがとう！」

「べ、べつにアンタたちのことが好きで沸かしたわけじゃないんだから！　ただ、暇だったから沸かしただけなんだからっ！」

「フェイトちゃん、早く入ろう！」

「うん！」

見事にスルーされた。

さっさと風呂場にいく二人。　俺はそれを見送ったあと、夜食を作るべく冷蔵庫へと向かう

「まあ、胃もたれしない食べ物だから……うどんでいいか」

ふたり分のうどんとネギを冷蔵庫から取り出す。　ネギを刻んでうどんを茹でる。　とても簡単な作業のように思えるが茹でる時間で固さがかわってくるから意外に難しい。　いまだに完璧なゆで時間にあったことがないのである。

キャーーーーーーーーー！

ミクちゃんへのポエムを考えながら茹でていると、風呂場から叫び声が聞こえてくる。

これを……まっていた！！

火をとめ急いで風呂場へと直行する。　あくまで人命救助である。　幼馴染が大変なことになっているんだ。　俺は悪くないはず。

「どうした二人とも、倒れたか倒れたのか！　そうだといってくれ！」

ガラリと開けたその先には、高町なのはとフェイト・T・テスタロッサがアヒルではしゃいでいた。　……あれ？

「……なにしにきたの？」

「……知ってた？　俺って前世アヒルだったからさ、仲間を助けにきたんだ」

「へー……そうなんだ」

「うん。　あとさ……この状況でいうのもなんだけど、フェイトのブラ壊しちゃった。　ごめんね、フェイト」

アイドルばりのスマイルを出したつもりが、ひょっとこのお面をはがすの忘れていたため失敗に終わってしまった。　というか、フェイトが指鳴らしながらこっちをみてるんですけど。　だったらこっちも貴様も胸を凝視してやるよ。　そう思ったところで、なのはの顔がドアップで目に映し出された。

「なにか言い残すことある……？」

「うどん伸びるから、早めに食べてください……」

俺は目をつぶった。

直後訪れる鈍痛

叫ばれる罵声

そのすべてを受け入れながら、俺はアヒルさんを胸に抱く。　頭の中にはそんな俺を見ながらも優しくほほ笑んでくれるミクちゃんの姿。

あぁ……やっぱり俺にはミクちゃんが必要みたいだ。

3．おっさんと過ごす夜（後書き）

（、・ω・、）・ω・、）

／　つ⊂　＼

おっさんの使いやすさは異常です

4．無職の朝は早い

『おはよう、ひょっとこ。　起きて、朝だよ』

「……んあ？　……もうこんな時間か。　せっかくミクちゃんにす巻きにされる夢をみていたというのに……」

ミクちゃんの抱き枕をそばに置きながら可愛い声でなく我がエンジェルの目覚ましを止める。　おはようミクちゃん、今日も可愛いぜ。

「さて……きょうはジョギングにしとくか」

クローゼットからランニングシャツとハーフパンツを取り出して手早く着替えを済ませ、玄関でランニングシューツを履き外へ出る。

うん、今日もいい朝だな。

突然だが無職の朝は早い。　というより俺の朝は早い。　まず起床時間からして頭がおかしいと思う。　なんといっても5時起きだ。

といってもこれにはちゃんとした理由があってだな……まず幼馴染の二人が6時には起きてくるのだ。　仕事だとぬかしながら。お前ら高校のときは寝坊して遅刻ギリギリだっただろうと言いたいところだが、これは成長の証なんだと思う。　なのはの胸は成長してないけど。　毎朝牛乳飲んでるのにな。　まあそれはおいといて……二人が6時に起きるものだから俺は必然的に二人よりも早く起きて朝ごはんの準備や弁当の準備をしなければならない。　ならもう少しだけ遅くおきてもいいじゃないかと思うだろ？　けどさ、体動かしておかないと太ったりするし、それが嫌なんだよね。　だか

らこうやって5時に起きてジョギングしたり散歩したりしているわけですよ。

「おうおう……ひょっとこくんじゃないかえ……。　おはようなー……」

「じいさんおはよう。　そろそろ天国へのカウントダウンがはじまりそうだけど犬の散歩して大丈夫なの？」

「えーえー、これはわしの唯一の楽しみじゃけんのう……」

ワンワン！　ワンワン！

「……言ってるそばから犬逃げ出したぞ、じーさん。　じーさんが持ってるのリードじゃなくてTバックだからね」

「なんとっ！？　わしとしたことがうっかりばーさんのテーバックを持ってきてしもうた！」

ばーさん無理しすぎだろ。　流石に若作りとかのレベルじゃねえよ。

「まあ、あんまり無理しないように気を付けてな」

あまり話し込んでいるのもなんなんで軽く手をあげて走り去ることにした。　じーさんはじーさんで楽しんでるようだし。

「さて、シャワー浴びて朝ごはん作るか」

適当に走って帰ってきた俺は、汗でべたべたしているシャツとハー

パンを洗濯器にかけるとシャワーを浴びることにした。　べつにシャツもパンツもいま洗わなくても俺的にはいいのだけどなのはたちが嫌がるのでこうやって一人寂しく洗うことに。　あ、なのはとフェイトの下着発見。　とりあえず分泌液でもつけておくか……。いや、さすがにそれはやめておこう。　本人たちが見ている前のほうが気持ちいいしな。

「それにしても弁当どうすっかな～。　意表をついて逆日の丸弁当にでもするか」

シャンプーで髪を洗い、リンスをした後バスタオル一枚でそう決意した。　どんな反応をするか楽しみである。

「というわけで台所につきました。　まずは弁当を作ります」

着替えたあと地底人と書かれているエプロンを着こなして台所にたつ俺。　気分はすっかり奥さんである。

「さて……まずはなのはの弁当ですが、弁当箱いっぱいに梅干しを敷き詰め中央に白米をそっと置いた愛情たっぷりの逆日の丸弁当です」

作り始めて1分。　これは俺の中でも最速のタイムである

「お次にフェイトの弁当ですが、ミートボールとからあげとポテトサラダにミニスパゲッティ、そしてごはんを敷き詰めます。　とりあえずフェイトは太らせるために別の箱におにぎりを2つほどいれておくとしよう」

作り始めて２０分。　なかなかの出来ではないだろうか。

結構ポテトサラダはうまく作れたと思う。　まあ、作り方は意外と簡単です。　まず材料はジャガイモときゅうりとハムと卵。　コツはしっかりと粉吹きのときに水分を飛ばすことと半熟卵のとろとろかんである。　これが意外と難しい。　それにジャガイモだって茹でるのに結構時間がかかるんだぞ？　お兄さんの秘密の魔法でそこは短縮できるけど。

そんなこんなで弁当を作り終えてお次は朝ごはんである。　食パンをトーストへ、冷蔵庫からバターといちごジャムを取り出す。　お次はハムと目玉焼きを作って、ちぎったレタスやスライスしたにんじんなどをいれ自家製のドレッシングできれいに仕上げたサラダを３人分テーブルの上にのせる。　ふう……お次は二人を起こしにいかないとな

「ウルフ１１　目標地点へ到着した」

なのはとフェイトの二人部屋に足を踏み入れた俺は、ポケットにいれていた携帯を耳に押し当てながら届かない電波を発信する。

「というかアレだよな。　こんな姿してたらそりゃ世の人たちに女好きと誤解されるわ」

眼前で二人して抱き合って寝ている光景をみながらそう呟く。　なのはとフェイトの間で押しつぶされているウサギになりてえ。

だが、そうはいってられない時間帯になってきた。　そろそろ二人

を起こさないと大変なことになる。

「ということで、官能小説を朗読しながら二人を起こしたいと思います」

一度部屋に戻り持ってきたのは妹系女の子がのっている官能小説。

これで爽やかなモーニングをお送りすることに。

「宗谷の腰がズンズンと真奈美を突いていく。『いやんっ！　宗谷、もっとハゲしくぅ！！』」

「……なにやってんの？」

「……朝の発声練習かな」

身振り手振りを加えて熱弁しようとしたところで、なのはから冷凍ビームが飛んできた。　あまりの冷たさに息子が縮み上がる。

「まあ、それはそれとして。　朝ごはんできてるからさっさと食べるざます。　そろそろ時間帯なんだし、隊長二人が遅刻なんて恰好悪いぞ」

「うん、そうするよ。　ほら、フェイトちゃん朝だよ～」

「うぅん……もっとお願い……」

「任せろ！　『真奈美、僕も限界』」

「いや、そっちじゃないから」

フェイトからのアンコールに応えようとしただけなのにバタなのは本を取り上げてしまった。　まったく、これで参考書が一つ消えてしまった。

なのはは寝ぼけているフェイトを起こすと、その場で本を破り捨て部屋から出ていこうとする――ところで振り返った。

「おはよう、今日も一日よろしくね」

「はいはい」

さて……送り出したあとは遊びに行くか

4．無職の朝は早い（後書き）

僕はマヨネーズをたっぷり使います。

そういえば活動報告にパンツ更新と書くのもアレなので、略語としてパン通を使うことにします。　あまり変わったようには思えませんが

5．たのしいお昼

「「いってきまーす！」」

「うーい」

朝食を食べ終え、歯を磨き仕事へ出かけて行った二人を玄関の外まで見送る。　二人を見送ったあとは本格的に家事をすることに。

まずは朝食に使った食器を洗剤で泡立たしたスポンジで洗っていく。

「へへ……これがええんやろ？　ここがお前の性感帯なんやろ？」

「いやんっ！　やめてください！」

黙って片付けというのも味気ないので一人芝居をすることに。　思わず息子が勃起した。　スポンジできれいに汚れを落としたら真っ白なタオルで一つ一つ丁寧に拭いていく。

「へへへっ……奥さんいい体してるじゃねえか……」

「いや、だめえええええええええ！」

人妻の設定で今度は芝居をすることに。　思わず息子が勃起した。

そうこうしている間に食器洗いが終わったので、お次は洗濯物を干すことと掃除である。

「さて、二人のパジャマと昨日の服を洗濯機にかけたので、この時間を利用して家の掃除をしたいと思います」

マイクを持ちながらリポーター風に言ってみる。

「さあみなさん。　現在私がいる部屋はあの高町なのはとフェイト・T・テスタロッサの部屋でございます。　みてください、所せましとぬいぐるみが置いてあります。　やはり女の子なんですね、とりあえずエロ本を置いておきましょう」

辺り一面にうさぎやカメ、猫に犬にカモメに白熊。　どれもこれもチャーミングな顔をしてやがる。　こいつらが毎日毎日二人に抱っこされてると思うとうらやましくてしかたない。

「まあ、二人がいない間に物色するのもアレなんでさっさと掃除をしてしまおう」

クイックルワイパーで床のホコリを取りぬいぐるみには専用のスプレーをかけて丁寧に拭いていく。　ついでに靴下などが入っている場所から黒のストッキングを拝借し、頬擦りする。　その心地よさにうっとりしていると洗濯機が俺を呼んだ。　まったく……可愛がってあげないとすぐ鳴くんだから。

そんなこんなで1時間30分ほどで家事を終わらせる。　さてと……今度こそ遊びにいくか

☆

「それじゃ訓練終わりだよー、みんなお疲れ様ー」

『お疲れ様です！』

「おつかれ、なのは」

「あ、フェイトちゃん。　おつかれさま～」

長い訓練が終わると同時に別の仕事をしていたフェイトちゃんがやってきた。

「それでどうだったの新人たちは」

「うん、みんな光るものをもっているよ！」

まだ経験が少ないけど、きっと此処にいる新人たちは将来管理局を支える子たちになると思う。　私たちのように。

「あ、そうだ。　みんなにこれ渡すの忘れてたよ」

「なんですか！？　もしかしてラブレターですか！」

「落ち着きなさい、スバル。　まだ早いわ。　もっと好感度が上がってから……伝説の木の下で恥じらいながらなのはさんが渡しにくるはずよ。　ハァ……ハァ……テンション上がってきたわ……！」

「安心して、一生ないと思うから」

どうしてわたしの直属の部下は二人揃っておかしいのだろうか。

家には頭おかしいを通り越して狂ってる男性がいるというのに。

「それよりも、はいこれ。　今日から一年間使うノートです。　え～っと、これはですね――」

「なのはさんの手垢！」

「汗が染みついてるわ！」

「ちょっと話を聞いてっ！？」

ノートに頬を摺り寄せる二人をヴィータちゃんが後ろから殴ってくれる。　ありがとう、ヴィータちゃん。

「こほんっ。　これは訓練のたびに感想を書いて提出するものです。見る人は私とフェイトちゃんとヴィータちゃんとシグナムさん。毎回毎回その感想についてコメントしていきます」

「なるほど、文通というわけですね？」

「なのはさん……いじらしく可愛いです……」

どういった解釈をすればそこにいきつくのだろうか。　というか、この娘たち絶対聞いてなかったでしょ。

「まあ、そんなわけですからちゃんと提出すること。　それでは解散！」

「あ！　なのはさん、一緒にシャワー浴びましょう！」

「肌と肌をこすり合わせましょう！　大丈夫、なのはさんにならなにされても大丈夫です！」

「ちょっとまって、私の意見は！？」

「わーい、フェイトさんお昼ごはんですよ！」

「うんそうだね、キャロ。　訓練でお腹すいてるだろうからいっぱい食べようね！」

「はい！」

私の可愛い娘であるキャロが可愛く頷く。

「あれ、なのはさんとフェイトさんはお弁当なんですか？」

「うんそうだよ。　彼が毎朝作ってくれるんだ。　これがなかなかおいしくて結構楽しみにしてたりして」

「そうそう、頭はおかしいけど料理は大抵できるよね」

家事もそれなりに出来るし、頭はおかしいけど。

「なのはさんのお弁当……なのはさんのお箸、なのはさんのお箸＝間接キス。　間接キス……！」

「ちょっとまってスバル！？　なにいきなり私のお箸を舐めようとしてるの！？」

「スバル、まだ早いわ！　食べ終わってからにしないと」

「あ、そうだった。　ごめんね、ティア」

「あれ？　私には？」

なのはも大変だよね、家にいても六課にいても誰かに振り回されてるような気がする……

「さて……とりあえずお腹すいたしお昼にしようよ！　それじゃいただきまーす！」

パカッ

オープン→逆日の丸弁当

パタンッ

クローズ→逆日の丸弁当

「あの……なのは？」

「……フェイトちゃん。　一応、聞いておくよ？今日のお弁当の中身なにかな？」

「えっと……からあげとミニスパゲッティとポテトサラダとミートボールだけど」

それを聞いた瞬間、なのはがものすごい勢いで携帯を取り出し誰かに電話をかけはじめた。

「ちょっと！　逆日の丸弁当ってどういうことなの！？　なんでフェイトちゃんのはちゃんとしていてなのはのは嫌がらせなの！」

「うわー、本当になのはさんのお弁当梅干しがほとんど占領している」

「ここまでくると、中央にのせてある白ごはんが怒りを倍増させるわね」

「ちょっと聞いてるの！　なんで逆日の丸弁当なのか聞いてるの！　私の質問に答えて！　――って、留守電じゃん！？」

「落ち着いてなのは！？　一人でノリツッコミしてるよ！」

怒りのあまりなのはが変になる。　というか、彼は留守電になんていれてあるんだろうか？

「ん？　もう一つ箱がある。　あ、おにぎりが二つ。　それになのはが好きな具だ」

もしかして彼かな？　というか彼しかこんなことする人いないけど。

それにしても――

「許すまじ……！」

「なのはさん、私のごはんどうぞ！」

「むしろ私をどうぞ！」

――タイミングが少しだけ遅かったかも

5．たのしいお昼（後書き）

なのは　（#・∀・）

フェイト　（＊´∀｀＊）

弁当を開けたときの二人の表情

6．おっさんで遊ぼう（前書き）

※今回のお話で行われる行為は絶対にマネしないでください

6．おっさんで遊ぼう

「さて、俺の予想だと今頃なのはが電凸してきて留守電と会話したあげくノリツッコミをしている頃だと思う」

なんでわかるかって？　だってなのはだもん。　バタなのなめんなよ、小さいころなんか手足バタバタさせてダダこねてたんだからな。　そのたびにアメ玉あげて黙らせてたけど。　昔はね、愛玩動物みたいで可愛かったんだよ？　いや、いまも可愛いけどさ俺のこと殴ってくるもん。

「まあ、それを見越して俺は携帯を置いてきたから問題ない。　帰ったら怒られそうだけど俺のトークスキルでなんとかしてみよう。　まずは遊びにきたんだから精一杯遊ぶぞ」

少し大きな広場にきていた。　中央には噴水、そこから東にちょっといくと大きな芝生の遊び場があって、噴水の近くには他より一段高いへんな面積がある。　いまは大学生のあんちゃんたちがダンスの練習中である。

俺はそれらを横目にみながら持ってきたサッカボールでリフティングを開始する。　コ〇ンくんにも負けないぞ！

「しかしこのままリフティングというのも悲しいものだから、ここはひとつゲームをしようと思う。　ストラックアウトというものをご存じだろうか？　９つのマスを野球ボールやサッカーボールを使ってぶち抜くゲームである。　一昔前に流行ったような気がする」

かくいう俺も中学校時代にしたものだ。　いまだ６枚抜きの記録は破られていないらしい。　いまの俺なら９枚抜きいけそうな気がするぜ。

しかし残念ながらここにはマスとなるものが一切存在しない……。
いったいどうしたものか。

「しょうがない、この前を通った人にぶち当てよう」

俺の餌食になった者は運がなかったということだ。　顔がバレないようにひょっとこのお面もつけることに。

一人目……女子高生

「推定膝丈２０ｃｍ、生足をいかんなく見せており寄せてあげるブラを着用しているな」

俺の透け視力により基本的な情報を得る。　高校生というものは一生のうちで一番のブランド品であり人生の中でも輝けるときだと思っている。　現役という肩書が大事なのだ。　高校を卒業してしまうとどうしてもコスプレにしか見えなくなる。　そう……なのはやフェイトのように。　女子高生とはいわば熟したリンゴなのだ。アウトかセーフかギリギリのラインにいるからこそ、輝きを放つ。
それはまさしく線香花火のごとく、消え去る一瞬を華やかに彩るのだ。

「こう書くとなのはやフェイト、はやてたちがババアだと言っているみたいに感じるがそんなことはない。　線香花火が終わったあと

にやってくるのが打ち上げ花火だからである。　いろんな人と出会い、好きな人と結婚し子どもを産み、育児をして子どもを成人になるまで責任をもって育て、その子どもの孫を抱き、孫の成長をめじりにシワを寄せながら見守り孫の成人を見届ける。　それが終わったあとに彼岸の川で待っているであろう夫の元へと逝く。　お別れのときには沢山の人が涙を惜しんで泣くまいと上をみる。　それはまさしく打ち上げ花火と同じじゃないか」

此処になのは達がいたのなら感涙しながら俺に抱きついてくるはずだ。　残念なことをした、その一瞬ならば胸を揉みしだくことができたというのに。　あ、ちなみにフェイトの胸ね。

「しかしながらさすがに女子高生に向かってサッカーボールをぶつけるのはためらわれる。　もっとこう……ぶつけても怒られなさそうな人はいないものか。　ん？　あそこにいるのおっさんじゃね？　いい的発見したぜ」

女子高生より右におっさんを発見した。　なにやら書類を手に持っているぞ。

いや、まてよ？　おっさんって管理局員だよな、日本でいう警察官みたいなものだろ？　そのおっさんに向かってぶつけるということは、すなわち現行犯逮捕につながってしまうのではないだろうか。　ただでさえブラックリストにのっている俺だ。　こんなしょうもないことで捕まるのはいただけない。　それにおっさんには何かとお世話になっているはずだ、そんなおっさんにサッカーボールをぶつけることなんてできるのだろうか？

「それでも――男にはやらなければいけないときがある。　こんなことしたくないけど、食らえおっさん！　死にさらせ！！」

『うおッ！？　なんだいきなりボールが――』

「ゴオオォオオオオォォオオオオオオオォォル！！」

全力で蹴ったボールは吸い込まれるようにおっさんの顔面へと熱いキスをしにいった。　おあついねえお二人さん。　ひゅーひゅー

俺はそのままダンス練習をしていた大学生の中に突っこんでいく

「ついに全国制覇だぞ、おまえら！」

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！』

「次は国際大会だ！　てめえら、気合は十分かッ！！」

『よっしゃあああああああああああああ！！』

「おい！　そこの中学生、胴上げするからちょっとこい！」

「えっ！？」

ノリのいい大学生に捕まって胴上げされる中学生。　なんか忘れているような気がするがいまはこの幸せな気分を味わっておこう

「みんなありがとう！　みんなのおかげで俺はここまでこれた！本当、おまえらは最高の仲間だったよ！」

「……そうかそうか、よかったな最高の仲間ができて。　大切にしろよ？」

「うん！」

「いい返事だ。　ところで、なにか重要なことを忘れている気はしないか？」

「いや全然！」

「そうかそうか、それなら教えてやろう。　――貴様の現行犯逮捕の瞬間だ、ひょっとこ！」

振り向くと鼻血を垂らしながら怒りのあまり角が生えたおっさんが立っていた。　おっさんいつの間に人間の皮を脱ぎ捨てたん？

「ごめんなおっさん、足が滑って」

「嘘つけ！　貴様のセリフは聞こえとったわぁ！！」

「きゃあああああああ！　おっさんが俺のケツ穴を狙ってくるうううううううううううう！！」

「逃げながらお前は何言ってるんだっ！？」

そこからはじまるおっさんと俺の追いかけっこ。　残念だったな、おっさん。　これでも俺は５０ｍ走で５．７を叩きだした男だぜ？

「待てといっておるだろうがあああああああッ！！」

アメンボ走法で走ってくるおっさんに恐怖を感じた瞬間であった。

6．おっさんで遊ぼう（後書き）

へ（、Д）ノ
≡（「ノ
／

おっさんの本気走り

7．MとMと　ときどきSと

「まさかおっさんがあそこまで速いとは思わなかった。　鼻血垂らしながら全速力で走るから余計に怖かったぜ」

おっさんと嬉しくない青春の汗を流した俺は帰宅早々シャワーを浴びながら先ほどのことをふりかえる。　道行く人が振り返ってたけどこれからのおっさんの信用が下がらないことを祈る。

「さて、シャワーを浴びましたので夕食の用意でもしますか。　今日の夕食はなのはが好きなものにします。　でないと俺の頭からザクロが飛び出してしまうからです。　ごめんねフェイト。　絶対フェイトが好きなものも近日中に作るから」

案の定、携帯をみると着信が入っておりなのはのノリツッコミがはいっていた。　これはパソコンのなのは専用フォルダにいれておくことにしよう。

それはともかくまずは夕食作りである。　愛用の地底人エプロンをつけ台所へ

「今日は薄切り肉のゆば巻きとわんこソバと煮物でいこうと思います。　では助手のミクくん、説明を」

「は～い！　まずは材料の説明です！　ゆば巻きは豚でもいいのですが折角なので牛の薄切りを使用します。　お酒とお塩に包むための大葉や一緒に食べるためのカイワレ大根を用意します。　あ、べつにカイワレはなくてもいいです。　そしてちょっとしたスパイス

として黒胡椒やわさびをいれるのもありですね。　湯葉巻きはお湯でもしゃぶしゃぶできるのですが、今回は豆乳でしゃぶしゃぶしましょう！　豆乳は美肌効果やダイエットにもいいそうです、それと生活習慣病の予防にもなるみたいですね。　ミクには関係ないですけど！」

「はっはーミクちゃん。　そんなことしなくても君は十分可愛いぜ」

「そ、そんなっ！　て、照れちゃいます……」

もちろん俺の一人芝居である。　あまり料理を作っている最中に喋るのはよろしくないけど勝手に口が動くのだからしょうがない。

「さて、同時並行で煮物もやっていきますが、シンプルに大根だけにしときましょう。　いっそのことふろふき大根にするのもありだな」

ふろふき大根にするためには米のとぎ汁が必要なんだけどたっぷりの水と少しのお米で代用しちゃおう。

「わんこソバは二人が帰ってきてから作るとして、ゆば巻きも二人が帰ってきてから最終段階にはいればいいからもうやることはないな。　久しぶりに靴磨きでもしよう」

たしか革靴が汚れていたようなきもするし

「というわけで玄関である。　とくになにもない玄関なのだが、靴箱の後ろに年上系エロ本が挟まっていたりする。　正直俺も取るこ

とができなくて焦っているのが現状だ」

さっさと読んでおけばよかった。

しゅこしゅこと革靴を磨きながら、ゲームの攻略法を考えていると外からふたり分の話し声が聞こえてくる。　どうやら帰ってきたようだ。

「ただいまー」

「おかえりんこ」

「ただいまん――あっ！　～～～！！」

フェイトが顔を赤くしながらなのはの胸に顔をうずめる。　フェイト、埋める人選間違えてるぞ。　あまりの可愛さに写メってしまう。

今週の待ち受けにしよう

「あ、そういえばなのは、俺の愛情弁当どうだった？」

「ごめん、嫌がらせしか感じなかったんだけど……、それより今度したらほんとうに怒っちゃうからね！」

「それじゃ明日はもっと愛情こめて縦一列にちくわ並べていくわ」

「人の話聞いてたっ！？」

「ごめん、フェイトの胸見てた。　ほんとムッチリしてるよな」

見かねたなのはが手に持ったバックで顔面を叩いてきた

「スーハースーハー、いい匂いだ」

「フェイトちゃん！　リセッシュ取って！！」

「うん！」

「ちょっ！？　なのはかけるとこ間違ってる！　俺じゃなくてバックだろ、そういうときは！？」

俺の存在をリセットしたいとでもいうのかこいつは。

「わ～！　なのはが好きな料理だ！　やったあ！」

「へ、へ～！　あんた、この料理好きだったんだ。　わ、わたしはそんなの知らなかったし……ほ、ほんとうよ！　し、知ってたら……も、もっと早くに作ってたわよ……」

「だ、大丈夫？　無理しなくていいんだよ？」

「……うん、僕大丈夫」

フェイトの優しさが心にくる

「ほらほら！　二人とも早く食べようよ！」

「うん、そうだね！」

「それじゃ手を合わせて、いただきまーす」

「「いただきまーす！」」

みんなでしゃぶしゃぶすることに。

「そういえば、この豆乳にはなにか隠し味いれた？」

「俺の分泌液」

「「……」」

「いや、冗談だから二人とも咽喉に指つっこむのはやめてくれ」

おまえら管理局の看板娘なんだろ。

それから今日一日のお互いのことを報告することに

「絶対おっさんは本部でも活躍できると思うんだ。　犯罪者とかバッタバッタと捕まえれるぞ」

「だから犯罪者の君を毎日捕まえてるんじゃないの？」

「失敬な、まだ予備軍だよ」

「ねえなのは。　私はインタビューでるときなんていえばいいのかな？」

「とりあえず友達未満他人以上の関係ということにしておこうよ」
「なんで俺が報道されること前提で話し合いをしようとするの？」
報道される奴は俺から言わせれば二流に決まってんだろ。　そんなヘマ犯すものか
「それにしても六課って明らかな人選ミスじゃね？」
「君は人生ミスだけどね」
「そのドヤ顔やめろ」
湯葉巻きを食べながらキリッとこちらをみてくるなのは。　ちょっと誇らしそうにしてるけど、いま俺の人生否定したということわかってるのか？
「それにしても今日は疲れたからお風呂入ってもう寝ようかなー」
「そうだね、私もちょっと疲れたかも」
「それじゃ俺は二人のベッド温めてくる」
席を立ったところで二人に袖をつかまれそのまま背負い投げさせる。
　疲れはどこいったんだ。
「後片付け、お願いね♪」
「まかせろ、舌で丁寧に舐めとるから」

グシャ

「なのはが履いているスリッパなら舐めればなのは味がするかもしれない……」

「フェイトちゃん！　変態がいるっ！？」

「こっちに振ってこないでよ！？」

そんなに力いっぱい手で払わなくてもいいじゃないか。

「まあ、いつまでもこんな恰好だと近所に俺となのはの関係がバレてしまうのでそろそろ足をおろしてくれ」

「どういった関係なの？」

「M・Mプレイをする関係かな」

「それ成り立たないよねっ！？」

「ちなみにフェイトはSね。　自慢のザンバー俺のスイカバーを叩いてくるんだ」

「フェイトちゃん……」

「ちょっとまってっ！？　いまの話信じる要素どこにあるのっ！？」

フェイトがムキーってなってる間になのはが足を引っ込める。　パンツみえた！　パンツみえた！　速報！　なのはの今日のパンツは水玉！

「それじゃ風呂はいっておいで。　俺は片付けしてベッドの周辺に盗撮カメラ仕掛けておくから」

「片付けだけお願いね」

「ま……まかしとけ……」

「返事頼りなさすぎだよっ！？」

一歩ごとに後ろを振り返る二人に溜息を吐きながら俺は台所へと向かう

「さて、箸を舐める作業にはいるかな」

これも立派な後片付けだと思っている。

7．MとMと　ときどきSと（後書き）

どちらかというと、なのはがSでフェイトがMな気がする

8．コイキングなのは

ピピピピピッ――ピピピピピッ

静寂な空間に電子音が響く。

ピッ――ピピッ

自己主張をするように鳴り響く目覚ましは誰かの手によってその主張をかき消された。　眠たげな眼をこすりながら高町なのはは体を起こす。　栗色の髪にいちごパンツが特徴の女性である。　時空管理局本局武装隊　航空戦技教導隊第５班に所属しており役職は戦技教導官。　わずか１９歳にして魔導師ランクＳの優秀な魔導師であり誰もが認める管理局の誇るエースである。

「フェイトちゃん、起きて。　朝だよ？」

「フェイトだと思った？　残念！　ひょっとこちゃんでした！」

パキッ

「指がッ！？　指がああああああああああああ！？」

なのはのすぐよこでカメラを回していた男性。　ベッドの中だというのに器用にひょっとこのお面をつけているこの男性は、高町なのは・フェイト・Ｔ・ハラオウン、八神はやてらの幼馴染である。　黒髪で人類史上稀にみるうざさが特徴である。　高町なのは＆フェイト・Ｔ・ハラオウンが借りた家に所属しており役職は家事をすること。　わずか１９歳にして二人に寄生していないと生きていけな

く、ミッドで起こる小さな事件の大半の元凶を占めているミッドが嘆くエースである。

「あれ？　そういえばフェイトちゃんはどうしたの？」

「べつの仕事だってさ。　なんでもロリコン宗教団体の弾圧に向かったとか。　だから朝早くから出て行ったよ」

「へ～、そうなんだ。　フェイトちゃんも大変だね。　それじゃ今日は一人で仕事にいくのか～」

「ああ、そのことなんだけどはやてからの伝言預かった。　昼の１時から出勤だってさ。　昨日買ったゲームをしたいから朝はいきたくないらしい」

「六課は大丈夫なのっ！？」

なのはの悲痛な叫びが木霊する。

「それはともかく朝ごはんできてるぞ。　今日はフェイトに合わせてサンドウィッチにしてみた」

「やったー！」

寝間着姿のまま、なのはは１階へと降りて行った。

フェイトは朝の新鮮な空気を胸いっぱいに吸いながら我が家へと帰宅していた。　朝早くから駆り出された仕事のほうも一時のケリはついたので自分はこうして帰っているわけだ。　あの宗教団体が私をみたときに呟いた『あと１０歳若ければ～……』という言葉は忘れない。　そんなことを考えているうちに見慣れた我が家へと到着、持っていたカギで玄関を開けリビングのほうへと顔をだす。

「ただいま～、二人ともいま帰ったよ～――って、どうしたの？」

「お～、フェイトおかえり。　サンドウィッチどうだった？」

「うん！　すごくおいしかったよ！」

「おかえりフェイトちゃん！　……そろそろ答えてくれないかな？君」

「え？　なにが？」

「とぼけた顔しないでっ！　なんでコイキングになのはの名前をつけてるのか聞いてるのっ！！」

テーブルを思いっきりなのはが叩く。　フェイトはそのままなのはの向かい側にいるひょっとこのところまでいき後ろから画面を覗き込むことに

なのは／コイキング　ＬＶ３１

「ぶっ！？」

「あ～～～！　フェイトちゃんいま笑ったでしょ！」

「ご、ごめんねっなのはっ！？」

「う～～～！　ふんっ！　どうせフェイトちゃんもわたし同様にへんなポ〇モンに名前つけられてるもんっ！」

「ねえ、ちなみに私のポケモンは？」

「ピチューだけど」

「納得いかないんですけどっ！？」

寝間着姿のままなのはが彼に抗議する。　あ、飴玉あげたら若干おとなしくなった。　もしかして不思議なアメかな？

「それよりフェイトは仮眠する？　いまだったらオプションとして俺がついてくるけど、ちなみに寝させないぜ」

「仮眠の意味を辞書で調べてきたほうがいいよ。　そのオプションはいらないかな。　う～ん、あまり眠くもないし私もゲームに参加しようかな」

「オッケーオッケー。　ほんじゃなのはをサクッと倒すからその間にとってくればいいよ」

「ちょっとまって。　いまのは聞き捨てならないかも。　なのはだってずっとやってきたんだからね！」

「いっけー、なのは！　はねる！」
「えッ！？　えっと……こう？」
「なにしてんの？　コイキングに決まってるじゃん」
「だましたねっ！？」
今日もなのはのキレは健在で安心した。

「あれ？　二人の戦いは終わったの？」
「うん、俺の圧勝で」
「コイキングを手持ちにいれてる人に負けるわたしって……」
どうやらフェイトがゲームを取りにいっている間に二人の勝負は終わったみたいだ。
「うわあああああん！　フェイトちゃあああああん！」
「だ、大丈夫だよ！　次は勝てるから！」
「わーーーい！　フェイトちゃーーーーん！」

「ちょっと、近寄らないでっ！？　いやぁっ！？　質量のある残像残しながらこっちにこないでっ！」

あまりの恐ろしさにフェイトは泣き目になりながら後ずさる。

「同じ幼馴染なのにこの対応の違いは大変遺憾に思います」

「妥当だと思います」

「その認識こそが間違っているのだっ！　もっと二人とも俺に優しくしてくれ！　パフパフさせてくれ！」

「願望が漏れてるよっ！？」

「……ごめん、なのは」

「胸みながら言わないでくれるかなっ！？」

二人で抱き合ってるとその差がわかる。　ミルタンクにフェイトとつけてもよかったかもしれない。

「んで、バタなのがポ〇モンやる気なくしたので俺とする？　大人のゲームする？　つるのムチとか使っちゃう？」

「普通にパーティーゲームしよっか」

「あ〜〜！　それじゃなのはマ〇オテニスしたい！」

なのはの提案でマ〇オテニスをすることに。

「あっ！」

なのは　右へ

ボール　左へ

「今度こそ！」

なのは　前へ

ボール　後ろへ

「サーブなら！」

なのは　ダブルフォルト

ボール　ジュゲム回収

「つ、次こそは！」

ガッ！　←コードをひっかける音

ビターン！　←なのはが転ぶ音

「「……」」

「もうやめるもん！」

「な、なのはっ！？　つ、次こそはできるから！　私も一緒に手伝うからっ！」

「こいつスポーツゲームできなさもＳランク並みだよな」

フェイトに泣きつくなのはをみながら思わずそう呟いてしまった。

とりあえず俺はお昼の準備でもしてこようかな。

8．コイキングなのは（後書き）

僕は９歳のころより１９歳のほうが好きなんですが、なかなか賛同を得ることができません。

9．高町なのはの憂鬱

昼間のゲームを終えてフェイトと二人で出勤してきた高町なのははいつも通り自分の机で仕事をしていた。

「「なのはさん、これお願いします！」」

「は～い。　二人ともお疲れ様～」

すると自分の部下であるスバルとティアナが二人揃って一冊のノートを持ってきた。　なのはが一番はじめに訓練のときに渡した感想を書くためのノートである。　ふと隣をみるとフェイトのほうにもエリオとキャロが二人揃って出しにいってるところであった。　もともとこの感想を企画したのには理由がある。　それは隊長陣からみた新人達の動きや様子と新人達が思っている動き方などをこのノートを通してみることによってちょっとした意見交換会の役割を果たせればと思って企画したのだ。　少しでも早く新人たちとの距離が近くなればと思っていたのだが、どうやらそれはなのはの杞憂に終わった。　それがなのはにとって嬉しいのかどうかは別問題だが。

それはさておき、なのははふたり分のノートをめくる。　どんな小さなことでもしっかり答えてあげようと思いながら。

スバルノート

『私は小さくても大丈夫ですから気にしないでください！』

ティアナノート

『なのはさん、シグナムさんに胸で負けてますが大丈夫ですか？』

「余計なお世話だよっ！？　なにこの嫌がらせ！？」

小さなところに対する励ましと質問に叫び声を上げながら、なのはは席を立つ。

「どうしたんだ、なのは？　隊長がそんなことじゃ新人に示しがつかないぞ？」

「あ、ヴィータちゃん！　ちょっとこれみて！　新人に示すどころか盛大に心配されてるんですけどっ！？」

「どれ……。　……大丈夫、なのはより小さい人もいるからさ」

「ヴィータちゃんにだけは言われたくないんですけどッ！？」

優しいほほ笑みでなのはの肩を叩くヴィータ。　ヴィータは成長することがない（ひょっとこ命名・ロヴィータ）ので永遠に１０歳程度の体なのだが本人はそれをポジティブに受け取ることにしている。

俗にいう諦めの境地に達しているのだ。

「そういえばはやてちゃんはどうしたの？　見かけないけど……」

なのはは仕事場を見渡すが親友である八神はやての姿は確認することができない。　六課設立のときは、『みんなと一緒に仕事せなサボってしまう！』そう言ってここに机を置いたはずなのだが……

「ああ、はやてならゲームしてるけど？　なんでもボスが強くてなかなか勝てないみたいだな」

「いやいやいやッ！　みんなとか関係なくサボってるじゃんっ！？
なんで、ゲーム＞仕事なのっ！？」
「違うぞなのは。　ゲーム＞＞＞＞［越えられない壁］＞＞＞＞仕事だろ。　はやての中では」
「なんのために六課を設立したのさっ！？」
今更ながらまともな友人が少ないことに頭を抱えるなのは。
「もういや……なんで私だけこんな目に……」
「なのはさんが泣いてるっ！？」
「スバルっ！　なのはさんの涙をビンに詰めて！　一滴もこぼすことは許させないわよ！」
「わかった！」
「それでなのはさん、どうしたんですか？　なにか嫌なことでもあったんですか？」
「現在進行形で起きてるよっ！」
ヴー！　ヴー！
そんなときなのはの携帯からバイブ音がする。　名前を確認すると彼の名が。　何事かと訝(いぶか)しむが、とりあえず電話に出ることに。

「はいもしもし？」

『おお、なのは。　唐突にバナナ・マンゴー・ランドを作ろうと思ったんだけど、どう思う？』

「うるさいよッ！！」

携帯を床に叩きつける。

「お、落ち着いてなのはっ！？　深呼吸、深呼吸だよっ！」

駆け寄ったフェイトに抱かれながら、なのははゆっくり深呼吸する。

「ふう……ありがとうフェイトちゃん。　フェイトちゃんだけだよ、なのはの味方でいてくれるのわ」

「そんな……味方なら此処にだって沢山――」

「スバル……なのはさんの泣き顔みてイキかけたわ」

「甘いね、私はイッたよ」

「どこにいるの？　フェイトちゃん？」

「……ごめんね」

なにかを悟ったように笑う彼女にフェイトはそう返すしかできなかった。

リンディ・ハラオウンは大型デパートの地下食料品売り場にきていた。　隣にはフェイトがお世話している彼がエスコートするかたちで手を取っている。

「それにしてもなのはちゃん怒ってたけど、大丈夫なのかしら？」

「はっはっは、大丈夫に決まってるじゃありませんか。　俺となのはの仲ですよ？　困難な事件に立ち向かった俺たちですよ？」

「ふふっ、よく覚えているわよ。　プレシア・テスタロッサにシャンパンファイトしたあげくアリシア・テスタロッサにまでかけてプレシアを本気で怒らせたのよね」

「あのときは死ぬかと思いましたね」

「いっそ死んでもよかったのよ？」

「え」

フェイトやクロノが仕事で忙しくなってからというもの、彼はこうやってよく買い物に誘ってくる。　大半は食材の買い込みなのだが、たまに服や下着を見に行くことも。　正直なところ、彼が下着売り

場にいくと警備が最大級にまで上がるのでこちらとしては勘弁願いたいところなのだが。

「それより、クロノのほうはどうですか？　最近会ってないですけど」

「エイミィと絶好調よ」

「明日速達でＢＬ本を送りつけてやる」

「まって、なんであなたが持っているのか問い詰めたいのだけど」

「それは聞かないお約束で」

この子はまったく変わらないわよね。　初めて会ったときもいまでも、変わることはない。　フェイトやなのはちゃん、はやてちゃんが変わる中でただ一人変わることなく過ごしてきた彼はある意味凄いのかもしれない。

「ちなみに今日の夕食はなにかしら？」

「そうですねー、フェイトが好きなドックフードにしようかと」

「人の腕とは簡単に千切れるものなのよね……」

「ごめんなさいリンディさんっ！　冗談ですから、冗談ですから腕を引き千切ろうとしないでくださいっ！？」

やっぱり、彼に限ってそんなことはないか。

9．高町なのはの憂鬱（後書き）

こうみえても僕はシリアスとか書くの好きなんですよね。　けどこの作品ってギャグじゃないですか？　これはいかんと思いまして、この作品でもシリアスを取り入れようと考えたんです。

けどいくら考えても、”おちんちんランド”意外のネタが浮かばないんですよ。

あれですか？　おちんちんランドでシリアスやれってことですか？　銀〇だってシリアス回のときには真面目にやってますよ。　それすら許されないんですか？　どうすればいいのかわかんないです。

※皆様の紳士力のおかげで１０万ＰＶ超えました。　ありがとうございます。　しょうもない作品ではありますが、クスリと笑って頂ける作品にしていきたいと思います。

１０．白パン大好き　スカリエッティ

仕事が終わり就寝前ののんびりタイムをなのはとフェイトは女性雑誌を眺めながら楽しんでいた。　これでも花も恥じらう１９歳。いろいろと思うところがあるのだろう。

「あ、なのはの恋人はすぐ近くにいるかもだってよ？」

「フェイトちゃんこそ、ずっと傍にいた人だってよ？」

「けど私たちの近くにそんな人いたっけ？」

フェイトの疑問によってなのはは考える。　すぐに浮かんできたのは神様が人類に苦しみを与えるために生み出した存在であろうひょっとこのお面を被った男だった――のだが

「うん、ないよね」

「そもそもあれって人間なのかな？」

「分類上人間に入るかな。　残念ながら」

ずっと傍にいた……というのもあるのかもしれないが彼は恋愛対象にはいらないのではないだろうか。　だって無職だし、頭おかしいし。

「けど意外に高校のときとかモテてたよね。　バレンタインのチョコとか女子全員から貰ったって聞いたよ？」

「そのうちの９割が至近距離からチロルチョコ投げつけられたという結果だけどね。　あのときは別の意味で鼻血だしてたよ」

「残りの１割は？」

「遠くからアンダースローでチョコパイ投げられてたよ」

「……それバレンタインを口実に日頃の恨みを晴らしてるだけなんじゃないのかな？」

少しだけ不憫に思うフェイト。

トントントンッ

そんなとき、２階から彼が降りてくる音がした。　あとは就寝だけであるがまたゲームでもするのだろうか？

「ご機嫌な蝶になったから、きらめく風にのって彼女の元へといってくる」

「はいはい、捕まらない恰好でお願いね」

「まかせろ」

なのはは六課の猛攻撃によって疲弊しており、うんざりした顔で手を振った。　彼も１９歳だ、さすがにへんな恰好で深夜徘徊なんてしないだろう。　そう思って振り向いた先に文字通り蝶がいた。黒の触覚に黒い翅（はね）。　鱗粉を真似ているのだろうかところどころラメがはいっている。　口には曲げたストローを咥え、足には黒のニーソ。　どっからどう見ても３６０。全方位で変態である。

「なんで自信満々に返事したのっ！？　捕まる気満々じゃんっ！？
というかそれ私のニーソだよねっ！？」
「なのはだけだと不公平だと思ってフェイトの髪を結ぶリボンで蝶ネクタイを作ってみました。　蝶だけに」
「そういう問題じゃないからっ！　いまので一気に不機嫌になったよっ！」
「それお母さんに買ってもらったのにぃ……。　ひどいよ！　あんまりだよ！　もう捨てるしかなくなったじゃないのっ！」
「そこまでいくのっ！？」
流石のひょっとこも驚きのあまり声を上げる。　フェイトは泣き目でなのはによしよしされている。
「もういいもん！　二人が構ってくれないから遊びにいくもん！
このペチャパイ！」
「それ個人攻撃してるよね！？　二人じゃなくて一人に言ってるよねっ！？　というかペチャパイじゃないもん！　ちゃんとあるもん！」
「つ、捕まっても引き取りにきてあげないんだからねっ！！」
「はっはー！！　そこらの二流と一緒にするではない！」
そういってひょっとこは勢いよく玄関から飛び出したのだった。

「とはいったもののすることはないんだよな、これが」

深夜の道を一人で歩く。　歩くたびに翅がヒラヒラ、鱗粉パラパラ、触覚フヨフヨ、うざいことこの上ない。

「ん？　あそこにいるのは誰だ？」

ひょっとこからみた真正面の家の周辺で黒コートを着て天狗のお面を被った男がウロウロとしていた。　じきにその男は家へと侵入し、白のフリルつきパンツを手に取って頬ずりする。　どっかみても変態である。　やがて何かに気付いたかのように男はそっと家を出てひょっとこのほうへと歩いてくる。

すれ違う二人

その瞬間、ひょっとこは声をかけた。

「まちな、あんた」

「……なにかね？」

男は足を止める。　その手には白パンツ

「白パンツをとるとはいただけないな。　何故その横にある縞パンを取らなかった。　白と水色で可愛かったはずだ」

「ふんっ、縞パンだと？　君は何をいっているのかね？　そんな前時代的な遺物にまだ未練を感じているのか？」

「なんだと……！」

ひょっとこは思わず距離を詰める。　蝶ルックスで

「君のような者がいるから時代は足を前に出しあぐねているのだよ」

「ほう……その言い方。　まるでお前が時代を先取りしているかのような口ぶりじゃないか」

「当たり前だよ。　これでも私は天才なんだ。　時代を読むことなんて動作もないよ」

黒コートの男は一歩詰め寄る。　白パンツを手に持ったまま

「何を言ってるんだ。　縞パンはその人自身を若干幼くさせロリに魅せる効果があるんだぞ。　白パンごときができると思っているのか？」

「甘いね、君は白パンの凄さをわかっていない。　純白な白から生み出される染みがどれほど興奮するものなのかわかっていないようだ」

「ふんっ、まだそんな段階とはな。　その段階ならば俺は5歳のときに幼馴染がおねしょをしたことによって到達しているぞ」

「幼馴染……だとッ！？」

男の目の色がかわり、体をプルプル震わせる。

「……君には幼馴染がいるというのか。　それこそ人類が生み出した究極にして至高の存在である幼馴染がッ！　モーニングでは勝手に自分の部屋にはいってきて寝顔を見ながらクスリと笑う幼馴染がッ！　一緒に登下校したりお弁当を食べたりして、ちょっと可愛い子に目がいってると膨れっ面になって怒ってくる幼馴染がッ！　夜には夕食を作りに来てくれ、そのまま夜の営みまで逝っちゃう幼馴染が君にはいるというのかねッ！」

「はっはっは、うらやましいか？」

「うらやましい！！」

なんとも素直な男である。　しかしながら、この男が彼の現状を知ったらどんな顔をするのか……それもまた興味深いものがある。

「しかしなんだね……、ここらへんにも君のような若者がまだいるとは、世界もなかなか捨てたものじゃない」

「それは俺も思うよ。　あなたのような人がいるとは、あなたとなら趣味が理解できそうです」

「ふむ、まったくもって同感だ」

およそ人類の底辺のような二人がまるで人類の代表者かのように話す姿はみていて頭が痛くなってくる。

「そういえば、あなたのお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「私の名前は、ジェイル・スカリエッティだよ。　みんなからはアンリミテッドデザイア、無限の欲望と呼ばれているよ」

「なるほど、無限の性欲ですか」

「君の欲望は性の一方通行なのかい？」

およそ正解といっていいのではないだろうか。

「して、君の名前は？」

「俺は正義のヒーローですからね。　名前は伏せています、みんなからはひょっとこと呼ばれていますね」

「ひょっとこくんか。　それではひょっとこくん、ともに道を極めていこうとではないか」

「ええ、あなたとなら極められると信じています」

そういって、二人は固い握手を交わす。　決して途切れることのない、消えることのない、男と男、変態と変態が交わした約束であった。

「よかったな、ひょっとこ。　お前にも友達ができて」

「それに趣味も合ってるからな。　さて、今日は思いもよらない収穫もあったし俺は帰ることにするよ」

「そうかそうか、なら――ちょっと交番でお茶でもせんか？」

「おっさんって忍びの家系だったっけ？」

『はい、もしもし。　高町ですけど』

「あ、なのは？　俺だけど……」

『ん？　なんで家の電話？　って、携帯置いていったのか。　それでどうしたの？』

「いや～……うん。　大変言いにくいことなんだけどさ、交番まで迎えに来てくれないかな？」

『さよなら』

「まってえええええええええッ！　お願いだから電話を切らないでえええええ！」

深夜の交番にひょっとこの声が木霊する。

どうしてだ……一流の俺が二流のような失敗を犯すとは……！

隣にいる友、スカリエッティに目を向けると

「あ、ウーノかい？　そう、そうなんだ。　管理局の人に捕まってしまってね。　え？　いやいや指名手犯だからとかじゃないんだけどさ。　えっと……白パンツを盗んじゃって。　あ、待ちたまえっ！　ウーノ、これには深い訳があるんだっ！」

「パンツを盗むのに理由もなにもないだろう」

「そして俺が捕まったのにも理由はないんだがな」

「お前は存在するだけで理由になるからいいんだよ」

「……世界が俺の敵というわけか」

そんなこんなでおっさんとお茶を飲みながらまったりと過ごすことに

「どうもうちのバカがご迷惑をおかけしました」

高町なのはは目の前にいる男性に深々と頭を下げた。　連絡がきてから1時間。　本気で来たくなかったのだがもしこなかったら交番の人にどれだけ迷惑をかけるか分かったもんじゃないので、嫌々ながらも引き取ることに。　ちなみに水色の短パンに白のTシャツ姿である。

「いやいや、こちらも慣れたもんですからね。　ただもう少しおとなしくなってくれればこちらとしてもありがたいものですよ」

「とか言っちゃって、本当は俺と遊ぶの嬉しいんだろう？」

「黙ってて」

「ぐふぅっ！？」

なのはのヒジがひょっとこのミゾに入る。　体を前に傾けながら必死に酸素を取り込んでいる幼馴染を冷たい目で見ながらもう一人捕まっていた人物の所へと向かう。

「あの～……すいません。　私の幼馴染がそちらを巻き込んでしまったようで……」

「いえ、こちらもドクターがそちらに迷惑をおかけしたようで……本当にすいませんでした」

「まともだっ！　まともな人にやっと出会えたような気がするっ！」

「？」

女性の対応になのはは感動して手を取る。　目にはすこしだけ涙を浮かべていた。

「あ、あの……何があったのかわかりませんが、その……頑張ってください。　えっと、これも何かの縁ですし、お互いの連絡先でも交換しますか？」

「是非！」

嬉々として携帯を取り出し互いの連絡先を交換する。

「え～っと、ウーノさんですか。　なんだか知的な名前ですね」

「ふふ、そちらもなのはとは可愛らしいお名前ですよ。　あなたにピッタリな名前ですね」

「当たり前ですよ、なのははコイの王様になるほどの素質をもっていますからね」

「話に加わってこないでよっ！？」

「いや、さびしいじゃん」

「後で付き合ってあげるからっ！」

「そんな……こんなところで告白なんて……」

「どんな思考回路してたらそうなるのっ！？」

いっきにペースを乱され憤慨するなのは

「それよりスカさん大丈夫なんですか？　なんかひどく打ちひしがれてるんですけど」

『……せっかく取ったパンツなのに……ウーノ、なにをしてくれるんだ……』

「気にしないでください。　それとパンツのほうはこちらで弁償することになりましたので」

スカリエッティは泣きながらその場に立つ

「ひょっとこくん……今日はもう立ち直れそうにないから話はまた後日にしよう……」

「お……おう」

ひょっとこが軽く引くくらい意気消沈しているスカリエッティはウーノと呼ばれた女性に手を引かれながらその場を後にした。

「それじゃ俺らも帰るか」

「とりあえずニーソは弁償してよね？」

「わかったよ。　それじゃこのニーソは俺が責任をもって処分しとくよ。　……なのはのニーソ……ハァ……ハァ……」

「もう嫌だよ、この幼馴染っ！？」

きっかりニーソを回収しながらなのはは交番の前で叫ぶのだった。

１０．白パン大好き　スカリエッティ（後書き）

スカさん書いてて楽しいです

11．円環の理に導かれたガジェットドローン

「あ、スカさん？　どうしたのいきなり電話なんかしてきて？」

『うむ、ちょっと遊びにこないかと思ってさ。　君が喜びそうなものがたくさんあるぞ』

昼も少しばかり過ぎたころ、友人であるスカさんから電話がかかってきた。　内容は自分の家に遊びにこないかという誘いであるのだが、いまからエッチなビデオを視聴したいので丁重にお断りをすることに。

「あ～、ごめんね。　いまから大事な用事があってだな」

『その用事とはよもやエッチなビデオを視聴することではないかね？』

「スカさん、エスパーになれるよ。　アンタ」

『ふっ、君の思考回路からすればそんなことだろうと思っていたよ』

どうやらスカさんには俺の思考回路がわかるらしい。　普段幼馴染たちから頭がおかしいと言われている俺だが、本当はあいつらのほうがおかしいのではないか。

『まあ、そんなエッチなビデオよりか面白いものがみれるから期待するといい』

そう言って、スカさんは電話を切った。

「いやいや、スカさんの家の場所わからないって。　……しょうがない、全知全能森羅万象の理を操るＧｏｏｇｌｅ先生で調べるか」

「すいませーん、スカさんに御呼ばれしてきたんですけどー」

「はい、お待ちしておりました。　こんにちは、ひょっとこさん」

「あ、ウーノさん」

先生で調べること１０分、あっさりと場所が見つかったのでバイクを飛ばしていくことに。　これでもバイクの免許持ってるんだぜ？　おっさんはねたりしてるけど。　華麗にキリモミしながら飛んでいくおっさんはなんでいまも生きてるのか不思議でたまらない。

そして俺のことを出迎えてくれた女性はウーノさん。　とっても優しくていい人みたいだ。（なのは談）　ただ、こういう人ほどベッドで乱れると凄かったりする。

「ウーノさん、俺と一発ヤりませんか？」

「ごめんなさいね、私はドクターだけのものなの」

「スカリエッティ、出てこいやゴルァアアアアァァアアアアアアアアッ！！」

いまので俺の中の何かがキレた。

俺がいろんなものに八つ当たりしていると、奥のほうからスカさんが出てきた。

「ちょッ！？　やめたまえっ！　そこらへんには私がウーノに内緒で隠した秘蔵のエロ本がっ！？」

「ドクター、ちょっとお話しを伺ってもよろしいでしょうか？」

「ち、違うんだウーノっ！？　いまのは言葉のあやというやつでッ！？」

「あ、発見。　とりあえず没収な」

スカさんがウーノさんにフルボッコにされてる間に秘蔵のエロ本を読むことに。　スカさん、さすがにふたなりはどうかと思うよ？

「よくきてくれたね、我が友よ。　それにしてもよく来られたね。
家の場所を教えてないというのに」

「Ｇｏｏｇｌｅで調べたよ」

「家の情報ダダ漏れではないかッ！？」

なにやらスカさんが慌てた様子でパソコンにつけ、何かを操作しはじめた。　案外せわしない人なんだな。

「それでスカさん、なにをみせてくれんの？　もしかしてあの秘蔵のエロ本のこと？　だったら持って帰るからもういいよ」

「待ちたまえ、あれは私の最高に抜けるものなんだ。　返してくれないか？」

「床オナでもしとけ」

ウーノさんとスカさんができてると知ったいま、俺はスカさんに容赦などしない。　つい先日男と男の約束をした気がしないでもないけど。

「こっちはエッチなビデオ見ながらなのはやフェイトの下着を嗅いで自慰をするという大切な用事があるんだぞ」

「君とあの娘がいまだにあんな関係でいられるのかがとても不思議なのだが」

「普通ですとなのはちゃんのほうが縁を切ってもよさそうですね」

「二人に寄生しないと生きていけないからな。　二人ともなんだかんだで俺を見限れないんだよ。　どうだ、うらやましいか？」

「誇ることではないぞっ！？」

「あなたのためにマダオという言葉がある気がします」

マダオ＝まるでダメな男

「ま、まあ、いいだろう。　それで今日君を呼んだのはほかでもない。　これをみてくれないか？」

「ふにゃちんですね」

「そこではないわっ！？」

そういってスカさんは何かのスイッチを押した。　すると大きな鉄の扉が開けられる。　どうやら格納庫のようだ。　ちょっとワクワクしながら中をのぞいてみるとそこかしこに機体があった。　なんだこりゃ？

「驚いたかね？　これはガジェットドローンといってね。　私が可愛い女の子を盗撮したいがために作った機体だよ。　完全ステルス製で、どんなところでも侵入できるよ」

変態に技術力をもたしたらここまでのものが完成するのか。
格納庫自体がとても大きいので数も尋常じゃないほど多い。
「うっわ～、ちょっとこれ面白そうじゃん！　スカさん遊ばして遊ばして！」
「あ、これっ！　ここらへんには緊急用に自爆スイッチが置いてあるのだからそこらへんを変に触ったら……」
ポチッ
ゴゴゴッゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！　↑ガジェットたちが自爆する音
「「……」」
「残念だけど、ガジェットたちは先に逝ったわ。　円環の理に導かれて……」
「導いたのは君だろうッ！？」
スカさんが泣きながら訴えてくる。
「どうしてくれるのだっ！　私が研究に研究を重ねて作った可愛い子供たちを壊してくれて！」
「まあまあ落ち着けよスカさん。　ほら、エロ本やるからさ」
「それはもともと私のだろうっ！？　なに君が家からもってきたみ

たいになってるんだっ！？」

「オーケーオーケー、かわりに俺が地道に盗撮した秘蔵のファイルをあげるからそれで許してくれよ」

「……さっきの件は見なかったことにしよう」

流石スカさん、話の分かる人だ

「あ、もしもし？　警察ですか？　ええ、ここに二人ほど変態がいるので逮捕をお願いしたいのですが……」

「「やめてくださいっ！？」」

ウーノさんが連絡した直後、おっさんがものすごい速さでこちらに向かってきた

「ええい、最終防衛システムはどうなっているんだっ！？」

「スカさん、おっさんの前ではそんなもの無意味に等しいっ！　ここは自力で逃げるしかないぞっ！」

「化け物にもほどがあるぞっ！？」

「おいっ！？　おっさん多重影分身してないかっ！？」

多重影分身をしながら俺とスカさんを追い詰めるおっさん。　この人は管理局の影のエースと呼ばれているに違いない。

１１．円環の理に導かれたガジェットドローン（後書き）

次話はちょっとシリアス風味にしていこうと思います

１２．墓前に捧げる一つの酒

カタカタカタ

「……」

カシャカシャカシャッ！

「……」

カシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャカシャッ！

「ティア、フィルムなくなっちゃったよ？」

「え？　もうなくなったの？　ちょっとまって、替えのフィルムあげるから」

「それより二人とも仕事してよッ！？　なんで上司の私が仕事してる横で平然と写真撮ってるわけっ！？」

「なのはさん！　その表情いいですよ、もう一枚！」

「なのはさん、こっちにもお願いします！」

「フンガーッ！！」

なのはが両手を上げて猫のように威嚇のポーズをとる。　今日も六課は平和である。

それを一番遠い席からオレンジジュースを飲みながらみているのは六課の部隊長である八神はやて。　高校時代に、ひょっとこと色々やらかした伝説がある女性だ。　はやては横でペロペロキャンディーを頬張っている自分の家族であるロリっ娘ヴィータに話しかける。

「そういえば、スバルはなのはちゃんに助けられたからあんなに慕ってるのはわかるけど、ティアナはなんであんなに懐いとるかしっとる？」

「いや、全然。　大方なのは萌えとかの狂信者じゃない？　ほら管理局にもいるし」

「ああ、そういやおったな、あの変な団体。　絶対に接触することなくなのはちゃんの危険になる存在であろう者たちを排除する、ある意味管理局の負の遺産やな。　けど、おかしいでアイツが排除されてないやんか」

「アイツはそんなものを超越する存在だからな」

「流石はミッドが嘆くエースだけある」

思い浮かぶのはなのはのパンツやフェイトのブラに命をかける男の姿。

「それにしても気になるな～……」

はやてはオレンジジュースを飲み終わりながら一人顎に手をおいた。

「いやあああああああッ！？　ちょっと、それ私のリップ！？」

「か、間接キスに……！」

「私が左でスバルが右だからね」

「まあ、楽しそうでなによりやな」

はやては眼前で繰り広げられる光景を見ながら彼に送りつけようと写メをとった。

翌日

ティアナ・ランスターは一人なのはを待っていた。　今日の服は黒の服に黒のタイトスカートというおよそ六課では似つかわしくない服装である。　若干緊張気味に自分の上司を待つティアナのもとにコツコツと一つの足音を響かせながらとある人物がやってきた。

「あ、ティア。　きょうは早いねって……その服装は？」

「あ、なのはさんおはようございます。　その……今日はどうしても外さない用事があって」

そこまで言うとなのはは何かを思い出したような顔をして、納得したように頷く。

「そっか……月日が経つのは早いね。　うん、わかったよ。　あとで私も行くからお兄さんにはよろしくね？」

その優しいほほ笑みがティアナの胸に浸透して、ゆっくりと広がる。

そんな感覚を胸に抱いたままティアナは一礼して六課を後にした。

タクシーで目的地に着くまでの間、ティアナは昔を思い出す。　自分が変わった日のことを、なのはに出会った日のことを、そして――兄の親友と名乗った男が現れた日のことを

兄が死んだ

それは小さな幼き日に起きた突然の出来事だった。

息を切らせながら自分に報告を告げた人の胸倉を掴んだのは覚えている。　そして変わることのない情報を前に崩れ去ったことも覚えている。　そこからはまるでタイムワープしたかのように一瞬に何もかもが過ぎていった。

「おにいちゃん……」

ティアナは知らず知らずのうちに兄の名前を呼んだ。　しかし墓の中にはいっている兄は可愛い妹の声に反応することはない。　どんなに呼んでも叫んでも自分が狂ったところで、兄ティーダ・ランスターが殉職したという事実はかわることはないのだ。

空は兄の死を悲しむかのように嘆くかのように泣いていた。　自分の頬から伝わる雫が雨なのか涙なのか、もう判別できないほどだ。

ティアナが悲しみに打ちひしがれているとき、後ろから声が聞こえてきた。

「情けない」

その一言で関を切ったかのようにさまざまな人たちが兄に言われもない罵倒をしだした。　なかには諌めようとした者もいたが、しかしながらその全てが無駄に終わる。　腹が盛大に出たいかにもな男性がその全ての言葉をかき消すのだ。　ティアナは幼いながらも悟った。　この人がこの中で一番偉い人なんだろうと。　誰もが彼に逆らえない。　場を収めようとした男性もいまは黙って唇をキュッと結んで耐えているだけであった。

世の中は不条理だ

ティアナはそう思った。

そんなとき、やけに間延びした声が辺りを支配した。

「あ、すいませ～ん。　ちょっと通してください。　あ、ダメッ！　そんなとこ揉んだらアヒンッ！　おっさん、いい趣味してるじゃねえか……。　なかなか受け入れられない道だけど頑張れよ」

「揉んどらんわ！？　いまの一瞬で私の地位を落としたことがわかっているのかね！？」

恰幅のいい男性がなにか抗議するが少年はどこ吹く風で笑っていた。

端正な顔立ちの少年である。

「よお、ティーダ。　期末試験受けてる間になに死んでんだよ、ダッセーな。　一緒に酒飲める年齢になるまで待ってくれるんじゃなかったのかよ……」

それはそこにいるもの全員を驚かせる言葉だった。

少年は右手で持っていたウイスキーを開け墓に上からかける。　ドボドボと音をたてながら落ちる酒は処理する者が誰もおらず地面へとゆっくり浸透していく。　やがて半分ほど減ったところで少年は注ぐのをやめ、かわりに自分が呷(あお)り――

「おえッ！　俺酒飲めないんだった……、おじさんその服かして……」

「ま、まちたまえっ！？　もう少し我慢するんだ、すぐにエチケッ

ト袋をもってくるから！」

「もう無理……」

オロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロッ！

恰幅のいい男性の服の中にむかって盛大に吐いた。

それからは阿鼻叫喚の図であった。　男性は急いで帰るし、それに付き従う形で参列者は帰って行った。　何人か貰いゲロした人もいた。

「さて……スッキリした。　士郎さん、もっと度数が少ないのくださいよ……」

「あの……」

「ああ、こないほうがいいよ。　俺ゲロったから、臭いきついと思うし。　それよりそこのおっさんは帰らなくていいの？」

少年が問いかけた先には、先程一人だけ場を鎮めようと頑張っていた男性がさっきと同じ位置にかわらず立っていた。

「此処に市民がいる限り、俺はこの場を動くつもりはない。　それより水をやるから口をゆすげ」

「おっさん気が利くじゃん」

「おっさんじゃねえよ、まだ若いに決まってんだろ」

やがてこの二人がミッドの名物追いかけっこの主役を演じる二人になるのだが、それはまたの機会のお話にでもしよう。

「それじゃ未成年の飲酒も見逃してくれ」

その言葉に男性は答えない。　答えることができない。　少年もそれをわかっているのか笑いながら楽しんでいるようだ。

「あの……！」

「ん？　お、すまんすまん。　つい話し込んじゃった」

少年はティアナの頭に手を乗せる。　そして子どもをあやすようによしよしとする。

「俺はティーダにお世話になった身でさ。　ビックリしたぜ……いきなり亡くなるなんて」

「殉職だ。　違法魔導師との交戦でさ」

「そっか……」

「ちなみにどんなお世話になったんだ？」

「パンツ盗んだときにちょっと」

「お前これ終わったあと、交番までこい」

「そんなぁっ！？」

それは墓前で繰り広げられるコント劇、観客はティーダ一人だけ。
やがて少年は墓の前にどっかりと座りこむ
「なあ、嬢ちゃん。　お兄ちゃんは好きか？」
「……はい」
「そっか」
隣に座ったティアナは小さく答えた。
やがてぐすぐすと小さな嗚咽が辺りを支配する
「悔しいか？　大好きなお兄ちゃんがあんなに言われて」
「悔しいです……！　ものすごく！　お兄ちゃんは、優しくて強くて！　私の憧れの人で……」
「俺もだよ。　あそこでおどけてなかったらあいつらぶちのめすところだった。　でもさ、そんなことティーダは望んでいないんだよな。　それで、嬢ちゃんはこれからどうすんだ？　言っとくが、俺が引き取るなんてエロゲ的な展開にはならないからな。　そんなことしたら、俺が幼馴染に殺される」
「……私は一人で生きていきます」
「金は？」
「なんとかします」

「一人はさびしいよ？」
「大丈夫です」
「今日のパンツの色は？」
「おまわりさん、この人です」
「おう」
「冗談ですからっ！？　手錠取り出さないでくださいよっ！？」
少年は慌てたように男性を静止させる。
「私……」
「ん？」
「私、大きくなったら管理局に入って……お兄ちゃんをバカにした人達を見返したいです……！　執務官になって……見返したいです！」
ボロボロ泣きながら、ティアナはふたりの前で喋った。
「魔力とかまったくダメだけど、それでも見返してやりたいです！」
「いい心意気じゃねえか。　だったら俺が天才に勝つ方法を教えてやるよ」

「……え？」

「天才ってのは９９％の努力と１％の才能で成り立っている。　それに引き替え凡人ってのは１００％の努力で成り立っているものだよな」

「……そうですね」

「だったら、１２０％の努力をすればいいだけなんだよ。　１０％の才能をもつ奴には２００％の努力をすればいい。　５０％の才能をもつ奴には１０００％の努力をすればいい。　１００％の才能をもつ奴には１００００％の努力をすればいいのだけの話なんだよ。　理論上はこんな簡単なことなんだ。　単純明快、ゆえに難しいんだけどな。　そもそも上限が１００％なんて誰が決めたんだよ。　そんなもん１００％までしかできなかった奴が決めたことだ。　俺はそんなもの認めねえよ、そんなクソみてえなくだらないものに自分の尺度を合わせる気はさらさらねえよ」

それはおどけることが得意な少年が見せた珍しい姿であった。

「まあ、それを嬢ちゃんができるかどうかは別問題だがな」

いつものように肩をすくめて、ちょっと挑発する。

「できます！」

その挑発にティアナは大声で宣言した。　少年がニヤリと笑う。

そんなとき、遠くのほうで少女の声が聞こえてきた。

「あ、見つけたよ俊くん。　もうなのはのケーキだけタバスコ味に

したでしょっ！　……って、これは」

「よお、なのは。　前に話しただろ？　ティーダさんのこと」

たったそれだけでなのははすべてを悟ったように深く頷いた。

「そっか……大変だったね」

「へっ……」

なのはは少年の傍らにいたティアナをそっと抱きしめる。　それはまるで優しい母親に抱かれたときのように暖かかった。　なのはは抱きしめたまま、そっと自分のもっていた傘をティアナに渡す。

「風邪引いちゃうから、ね？」

微笑んだ後、男性の元へと向かったなのはは敬礼しながら喋る

「時空管理局本局武装隊　航空戦技教導隊第５班　一等空尉の高町なのはです。　故人の死因及びお名前を教えてください」

「ハッ！　時空管理局　首都航空隊　一等空尉　ティーダ・ランスターであります。　死因は違法魔導師との交戦による殉職であります。　なお、犯人は捕まった模様です」

「そうですか……ありがとうございます」

なのはは頭を下げてお礼をいうと、墓へと向き直る。

そして声高らかに宣言した

「勇気ある管理局員！　ティーダ・ランスターに敬礼！」

「……え？」

「あなたの勇気ある行動を忘れません！　あなたのおかげで沢山の市民が笑顔で日々を暮らせます！　ほんとうに、ありがとうございました！」

少年が少女が男性が、自分の兄の墓に向かって真剣な表情で敬礼する。

そのことが嬉しくてティアナ・ランスターは先ほどとは違う涙を流していた。

あれから１０分後、二人が帰る時間がやってきた。

「それじゃ、ティアナちゃん。　ティアナちゃんがくるの楽しみにしてるからね？」

「あの……」

「ん？」

「ティアって呼んでくれませんか……？」

モジモジと恥ずかしそうに眼をしながらもまっすぐとなのはに言っていくる

「うん！　それじゃバイバイ、ティア」

なのははひと撫でして立ち上がった。　傍らには少年が、ニヤニヤみながらティアナをみていた。

「お前って、天然ジゴロにもほどがあるよな。　まあ、それはさておき嬢ちゃん――ガッカリさせんなよ？」

ニヤリと笑いながら少年は少女とともに、一つの傘を使って帰って行った。

これがティアナ・ランスターの記憶

全てが変わった日の出来事である

「お客さん、到着しましたよ？」

「あ、すいません」

過去を振り返っている間にどうやら目的地にはきたようだ。　ティアナはタクシーを降りながら思う。

初恋の人は？　そう聞かれたら高町なのはと自信満々に答えるだろう。

一番の親友は？　そう聞かれたら恥ずかしながらもスバル・ナカジマと答えるだろう。

一番会いたい人は？　そう聞かれたら兄のティーダ・ランスターと瞳を潤ませながら答えるだろう。

では……一番気になっている人は？　そう聞かれたらティアナは、思案顔になりながらあの日に会った少年と答えるだろう。

あれから一度も会ってないのだ。　しかしながら毎年毎年、ウイスキーと花が墓前に置かれているところからみると毎年来てくれることはわかる。

コツコツコツ

墓への道を歩き、もうすぐ兄の墓が見えてくるあたりから男性の声が聞こえてきた。

何事か？　そう思いながらティアナは少し足を速めたどり着いた先には――

「悪霊退散ッ！　悪霊退散ッ！」

ひょっとこのお面を被った男性が兄の墓に向かって塩を投げつけて

いた

「なにやってるんですかーーーーっ！？」

「おうわっ！？」

男性は驚き大きくのけぞる。　ティアナは駆け寄り胸倉を掴みながら問いただす

「人の兄のお墓でなにしてくれてるんですかっ！　訴えますよ！」

「ち、違うんだよっ！　スカさんから貰ったスカウターで悪霊がみえたから俺が退治しようと思って――」

「その前に私があなたを退治しますよっ！！」

スカウターを取り上げながらティアナは睨みつける。

「ビックリした～～……嬢ちゃんと鉢合わせするなんて」

「え？」

小さくつぶやいた声をティアナは聞き逃さなかった。

「あ、俺そろそろ行かないと。　スカさんとマ〇オカートする約束なんだよね」

「……へ？」

男性は慌てたように早口でそうまくしたてると、スルリとティアナ

から抜け出し来た道を戻る――寸前でふと何かを思い出したように振り返る。

「嬢ちゃん、どうだ？　あのときと比べると？」

心配するような挑発するような声に先ほどまで振り返っていた過去の少年と重なった。

いまでも少年は心配しているのだ。　きっと、これからも心配するのかもしれない。

だからこそ――いまの自分がどんな状態にいるのか、どんな気持ちを持っているのか、この心配性な少年に伝えよう

「はい！　とっても幸せです！」

兄は失ってしまったけど、かけがえのない友と、大好きな人と一緒にいる。

そんな私はいま幸せだと実感できる。

「そっか。　まあ体のほうはいまだガッカリボディだがな」

「なっ！？」

少年から青年へと姿を変えたあの人は、そう笑いながら颯爽と私の前から姿を消した。

「なんか……かわってないなぁ」

「あれ？　ティア、まだしてなかったの？」

「あ、なのはさん！」

青年が消えたところから、大好きななのはさんが顔を出す

「えへへ……はやてちゃんが体動かしたいから、代わってほしいって頼まれてさ」

「はやてさんも凄い人ですよね」

「ティア、世の中にははやてちゃんよりヒドイ人がいるんだよ？」

「あっ……そうなんですか」

というかこの人、さらりと幼馴染をヒドイ扱いしなかった？

「それより、ティーダさんがティアの報告を聞きたそうにまってるよ」

「あっ、そうでした！」

そうしてお墓の前でなのはさんと二人手を合わせる。

お兄ちゃん、お元気ですか？

私は元気でやっています。　かけがえのない親友と、大好きな人。
　厳しくも私を支えてくれる人達に囲まれて執務官になるべく勉強中です。　いまはまだ、経験も技術も足りませんがいつか立派な執務官になりたいと思います。　だから、だから安心してください。

あなたの妹は、１００００％の努力で頑張っています

カランッ！

そのときティアナの耳には確かに聞こえた。

ウイスキーをいれたグラスに浮いている氷が溶けた音

青年が墓前に捧げた一つの酒の音、そこから嬉しそうにはしゃぐ声が。

１２．墓前に捧げる一つの酒（後書き）

読了時間もいい具合なのでここらで一つ真面目な話を

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6663y/

パンツ脱いだら通報された

2011年11月26日21時09分発行